

ヒマラヤ

No. 101

●特集

第1回セミナー・トレッキング報告



1980 APR.

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

昭和55年度通常会員総会のお知らせ！！

日本ヒマラヤ協会昭和55年度通常会員総会を下記により開催いたします。

電話 (03 467 - 3111)

ご承知のように、総会は本会の最高意志決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました総会通知状の、返信用はがきをご利用ください。4月5日まで必着するようお願いいたします。)

記

1. 日時 昭和55年4月20日午後1時
2. 場所 岸記念体育館5階会議室
(東京都渋谷区神南1-1-1)

3. 議事

- (1) 議案第1号 昭和54年度事業報告について
- (2) 議案第2号 昭和54年度収支決算について
- (3) 議案第3号 定款の一部変更について
- (4) 議案第4号 会費の変更について
- (5) 議案第5号 昭和55年度事業計画について
- (6) 議案第6号 昭和55年度収支予算について

4. その他

総会終了後、同会場において第1回セミナー・トレッキング(ネパール)隊報告会を行います。スライドをまじえて隊の行動報告および各隊員の研修成果の発表を予定しています。あわせて出席くださるようお願いいたします。

表紙の言葉

高橋 正幸

西部ネパールには8,000 mのジャイアンツ峰がないせいか、華やかな登山記録はない。しかし、ヘルベルトティヒーの西部ネパール横断記録「無名峰の聳える国」の題通り未登の峰、未知の谷がまだ残っており、これらの探求の小遠征隊には格好の地域である。

このナンパ山群は1～8峰まであり、主峰の2峰が登頂されているのみである。

ナンパ山群(N5, N6) Salimor Khola より

ヒマラヤ No.101

1. ヒマラヤ放談 ソナム・ヌルブ・スプルカバ

4. ヒマラヤニュース 〈地域・文献・新刊・トピックス〉

8. 特集 第1回セミナー・トレッキング報告

連載

遠征学入門 ⑪	西郡 光昭
未踏への誘い ⑪	鈴木 修
ヒマラヤ閑話 ②⑧	五百沢智也
V. エルウィン小伝 ⑦	藤井 毅

24. 事務局日誌

ヒマラヤ放談

ラダックは西チベットともいわれ、ラマ教のゴンパをはじめとして、チベット文化が色濃く残っている地である。1974年以来、外国人にその一部が開放され、H A Jの会員も多くの人がこの地を訪れた。このラダックの中心地レーで、ラダック人として初めて観光の仕事をはじめたソナム・ヌルブ・スプルカバ氏(Mr. Sonam Norboo Spurk-hapa)の来日の機会を掴んで、ラダックのあれこれについて話をしてもらった。氏はインドエベレスト隊の最年少だったソナム・ワンギャル氏の甥にあたる。



ソナム・ヌルブ・スプルカバ

◎ラマ教・ラマ僧

—— ラダックといえばラマ教の世界として知られていますが、最近のラマ寺院、ラマ僧の様子はどんなんですか。

ソナム ラダックの全人口は約100万人ですが、ラマ僧はそのうち3,000人弱で、以前より少し減少しています。昔は一家から1人はラマ僧になったものでした。たいていは長男が家をつぎ、次男がラマ僧になりました。三男以下は同じ家に住むか出稼ぎに出ました。しかし、このごろでは、いわゆる文化的な生活をする人が特に町では増えそれに伴って僧になる人が少なくなりつつあります。

—— ラマ僧になろうという人は何才位から寺に入るのですか。また、どんな修業をするのですか。

ソナム 親のすすめなどで7才位で坊さんになります。寺に入ればほとんど一生を寺で暮すことになり、一般の人から見れば可愛想ですが、ラダック人にとっては、ラマ僧になるということは仏になる近道だと信じていますから、苦しい淋しいことではないのです。子供もこのことはよく知っています。また、そういう信心深い子供が僧になります。

朝4時頃に起床し、お寺の掃除をした後、本堂に集まってお経をあげます。小坊主のうちは、先輩の僧にお茶を出したりして見習いをする訳です。これがすむと、8時か9時頃になり、朝食をとります。朝食後はお経の勉強です。修業がすすめば、僧同志で経典やラマ教の教儀について討論したり、

論争したりします。

昼食後から夕方までは自分1人で勉強します。外に出てお経を暗誦する時間でもあるのです。瞑想をするのもこの時間うちです。

夕方にはまた本堂に集まり、長いお経を読みます。11時頃に就寝します。

このような毎日を過すうちに、お経を憶え、きめられた行を修め、戒律を守れるようになります。各々のお寺で違うようですが、25才くらいで250位のお経を憶えて一人前のラマ僧ということになるようです。50才くらいで住職にあたるえらいラマ僧になります。かつてはラマのもっと大きい寺に行って修業をし、帰ってきてから住職になったのですが、今はラサのラマ寺にはえらい坊さんが少ないので、それはできなくなったようです。

小坊主のうちにあまりお経などが憶えられなくて、それよりも食事を作ったりすることに能力のある人は、そういう世話をするラマ僧になります。

—— 活仏というのはいまでもあるんですか。

ソナム あります。ラマ寺では活仏が一番えらいのです。有名なのはダライ・ラマですが、その他にも沢山の活仏がいます。活仏は、カーネーション(転生)によってできるのです。その寺の活仏またはえらい僧の死んだとき、生まれ変わってくると信じられています。いろんな儀式と方法で新しい活仏は発見されます。

—— このあたりが密教としてのラマ教の興味深いところだと思いますが、専門的になりますので、またの機会に詳しく聞かしてください。ところで

ラマ僧が死ぬとどうなるのですか。

ソナム 原則として死んだラマは家へ運ばれ、その近くで墓に埋葬されます。結婚もしない、酒やタバコは飲まない、肉は食べないという生活が続け、仏の道へむかって歩き続けます。厳しいものです。

◎ラダックの旅行事情

— 話をラダックの旅行事情に移したいと思いますが、スリナガルからレーまでの交通はどんな具合ですか。

ソナム バスやジープが一般的です。1日で行けないことはありませんが標準で2日かかります。スリナガルからレーまで週1往復の飛行機便もあります。

ジープをチャーターすると、レー、スリナガル間で1800 Rs 位です。カルギルまでですとその約半額です。

レーにはジュンガ・タクシーというジープのタクシーがありますが、1日貸切ると350 Rs くらいです。レー周辺の40kmまでならどこへでも行けます。ジープも新しい良いものなら1日500 Rs 位です。古いジープはよく故障しますから、少し高くても新しいのがいいですね。レーからヘミスの往復で350 Rs 位、アルチへの往復だと400 Rs 位です。

— ホテルは新しいのができましたか。

ソナム 沢山できました。レーで大きいホテルはラリモー・ホテル、シャンバラ・ホテル、カングラチャ・ホテル、ケサラ・ホテルなどで20~25部屋あります。料金は三食つきで270 Rs 位です。

— 高いんですね。安いのはどのくらいですか。

ソナム 次のクラスが180 Rs 位。そして80 Rs、50 Rs ……とあって一番安いのは、泊るだけで5 Rs くらいです。安いホテルはいわゆるゲスト・ハウス、民宿です。あまりきれいでなくてもよければ民宿が一番です。安いし、それに、土地の食べ物など作ってくれますからね。

— スリナガルとレー間のホテルはどうですか。

ソナム たいいていカルギルで泊りますが、カルギルにも新しいホテルができています。スル川に少し入ったところにあるゾジ・ラ・ホテル(150Rs)

もう少し奥のハイランド・ホテル(250Rs)それと、政府のレストハウスのすこし上にあるヌン・クン・ホテルというのがいいホテルです。ここは食事もなく、部屋もきれいです。1泊2食つきで130 Rs です。他の2店より安いです。しかし、丘の上の方ですから少し遠いです。その他の村にも簡易ホテルやゲスト・ハウスがあります。

— カルギルは汚ない街で、南京虫も多いところですから、そんなきれいなホテルができたのは有難いですね。

ソナム そうです。しかし、カルギルは水が良くないなどまだまだ宿泊地としてはよくありません。一般のバスならここでもどうしても泊らなければなりません、ジープ等をチャーターした場合はカルギルに泊らないようにするのも一つの方法です。

帰りは飛行機を利用して1時間弱でスリナガルへ着く人も多いです。

この飛行機からの写真撮影は何とかできるようです。カラコルムとカシミールの山が見られます。冬も飛んでいますから、景色を見るなら冬がいいですね。

— そのようなホテルなどをあっせんしてくれる観光局がレーにありますか。

ソナム ありません。しかし、インドの旅行社の支店がいくつかあり、そこで世話してくれます。

◎ラダックの冬

— 日本人のサラリーマンは夏と冬に休みがとり易いのですが、夏はともかくとして、ラダックの冬はどんな様子ですか。

ソナム 冬はいいですね。雪も少しは降りますがすぐに消えてしまいます。特にレー周辺は雪が長い間積るということはありません。

— スリナガルとレー間はどうですか。

ソナム スリナガルからダラスあたりは雪が多いです。特にゾジ・ラからダラスにかけては積雪も2m、3mとあり、大変です。カルギルあたりから雪は少なくなります。ですからスリナガルから冬に車でレーに入ることはできません。飛行機によるほかありません。

— 冬には何か行事がありますか。レーの正月など……。

ソナム ラダックのお祭は冬に多いのです。11月から始まって4月頃までいくつもあります。ラダックの正月は12月19日～20日にあります。スピットの祭が1月15～16日、ティクセが2月2日～3日、レーとリキールの街の祭が2月14日～15日、チベットの正月が2月16～17日、ストックの祭が2月24日～26日、マツショーが2月末日～3月1日、シャイが3月16日、ラマユルが4月2日～3日などと沢山あります。これらの日付は年によって多少ちがいます。

冬に祭が多いのはラダックの人は冬は仕事がなく、比較的ひまでしかも、雪は多くなく、行き来も楽だからです。大きいお祭りのときはバスやジープが出ます。

—— ラダックは緑の少ないところですが冬はなおさらでしょうね。

ソナム はほとんど緑はなくなります。しかし、それが、日本のような緑の多いところからきた人にはかえって旅らしくていいのではないのでしょうか。緑はありませんが、山の色はいろんな色をしています。そして、上の方には雪が一面についています。冬のカラコルムの遠景はすばらしいです。

—— レーの南のカルドン・ラあたりから見るとすばらしいでしょうね。

ソナム カルドン・ラをこえて、シャヨーク川まで自動車道路が完成しましたから、歩かずに行けます。カルドン・ラは標高約5,600mありますから、世界で一番高い山岳道路です。ただし、残念ながら外国人は立入禁止です。ここまでオープンするという気配はありますが……。

—— 交通の便の悪いラダック、しかも冬に行ったとして病気になったらどうなるのか心配ですね。

ソナム 病気になっても心配いりません。レー・ホスピタルという病院があります。軍隊の病院もあり、設備は東洋一といわれています。民間人も急病のときは入ることができます。標高が高いので慣れない人は疲れないようにするのが一番です。

◎ラダックの料理

—— そんな冬には食べものが一番だと思いますが、どんなものを食べているのですか。

ソナム 一番のごちそうはモモと呼ばれるぎょう

ざの大きいようなものです。そして、チョウミンといううどんです。スープに入れて食べたり、スパゲッティのようにしたりします。あとは、グルグル茶という紅茶にバターと塩を入れたお茶です。そして夜はチャンという地酒です。

朝はチャパティとヨーグルト、それにお茶ですが、昼や夜はごはんも食べます。ツェンパという麦こがしの粉にバターや砂糖を入れてケーキのように焼いたのもうまいですね。

—— 食べものの話のついでに、ラマ僧の食事は誰れが作るのですか。

ソナム お寺にそういう料理を作るラマ僧がいます。材料は、村の人の寄附によっています。日本のお坊さんのように托鉢して歩くのではなく、村の家へお教をあげに行ったときにもらってくるのです。大きいお寺では、お寺の中に畑などをもっているところもあります。ヘミスで200人余りのラマ僧がいますから食事も大変です。チベットの昔の大きい寺、ラサのゲオン寺は1万人、セラ寺は8,000人もいたのとは大分違いますが……。

—— 一般の人がラマ僧を養っているということになりますが、それに対する不満はないのですか。

ソナム 今のところは全然ありません。ラダックのラマ教徒の人は小さいときから地獄、極楽や六道輪廻を信じていますから、できるだけこの世でいいことをし、極楽へ行き、生まれ変わる時はよりよい人間になりたいと思っています。地獄へ落ちるということをおそれているのです。極楽は西の方にあると信じていますが、そこへ行くのには仏にすがるのが一番なのです。それで、仏に仕えるラマ僧を大切にします。

—— 信仰の強さを感じさせる話ですね。日本人も、もっと遠くを見つめて生きる必要がありそうですね。

ソナム そうですね。日本の方も、人間の心のふるさを感じるラダックへもっと多くの人がきていただけることを願っています。

(ソナム氏の連絡先は、「10, Amarchamber, Nahar House, F-14, Cornnaught Circus New Delhi-110001 Tel 44707 Cable NORBOO」で平がなであれば日本語での手紙でもよいとの事である。) (インタビュー構成 沖允人)

地域ニュース

《インド》

複数登頂時の登山料改定＝IMF

現在、インドの登山規則では、一山ごとに一通のアプリケーションを提出し、それぞれ許可を得て高度に応じた Booking Fee (3,000 IRs-4,000 IRs) を支払って登る仕組みになっている。

原則的には許可されたピーク以外には登ってならないことになっている。

この規則は現場でのリエゾン・オフィサーの権限によって複数ピークの登山が許可されたり、或いは登頂後の Booking Fee の支払いをめぐる多少の問題が出されていたところである。

しかし、このほど IMF は複数ピークの登山に対して次のような規則改定を行なっている。

「主目標の山以外の山に登ろうとする時は、その山々を届け出ること。6週間の登山期間内ですべての登山を終えることを条件に主目標以外の山については登山料を半額にする。」

というものである。

けれど、この場合の申請方法や他隊との競合など考えられる幾つかの問題があり、目下問合わせ中である。

《ネパール》

プレ・シーズンは32隊が入山

今年のネパール・ヒマラヤは空前の盛況で、以下の32隊が入山する。

1. アンナプル I (8,091 m) 西ドイツ
2. アンナプルナ II (7,937 m) 北面 日本 (上市峰窓会)
3. アンナプルナ II (7,937 m) 南稜 ポーランド
4. アンナプルナ III (7,555 m) オーストラリア・ニュージーランド合同
5. アピ (7,132 m) イギリス
6. バルンツェ (7,220 m) スペイン
7. バルンツェ (7,220 m) フランス

8. ダウラギリ I (8,167 m) スイス (北東稜)
 9. ダウラギリ I (8,167 m) イギリス・ポーランド合同 (東壁)
 10. エベレスト (8,848 m) 東南稜 スペイン
 11. エベレスト (8,848 m) 南稜 ポーランド
 12. ファング (7,647 m) 南稜～西稜 オーストラリア
 13. ガネッシュ II (7,150 m)・V (6,950 m) 日ネ合同隊 (滋恵医大) 東稜
 14. ガネッシュ III (7,132 m) 日ネ合同 (信大) 北稜 (西稜からか?)
 15. ガウリサンカール (7,146 m) オーストラリア・ネ合同 南西壁
 16. カンチェンジュンガ (8,598 m) 南西壁 (ノーマル) 西ドイツ
 17. カンチェンジュンガ (8,598 m) 北壁 山岳同志会
 18. カングルー (7,010 m) 南東壁 弘前海外登山技術研究会
 19. ラムジュン・ヒマール (6,983 m) 北面 法政大学
 20. ランタン・リルン (7,245 m) 南壁 イギリス
 21. ローツェ (8,511 m) 南壁 フランス
 22. ローツェ (8,511 m) 西壁 スペイン
 23. マカルー (8,481 m) 西稜 アメリカ
 24. マカルー II (7,660 m) 西壁 アメリカ
 25. マナスル (8,156 m) 東壁 韓国
 26. ヌンブール (6,959 m) 北壁～東稜 蔵王山岳会
 27. マナスル (8,156 m) 南稜 ポーランド
 28. プモ・リ (7,145 m) 南稜 韓国
 29. シスネ・ヒマール (m) 北西稜 スイス
 30. タムセルク (6,608 m) 北壁 山岳同志会
 31. ティリツォ (7,134 m) 北稜 西ドイツ・スイス合同
 32. ヤルン・カン (8,505 m) 南西壁 メキシコ
- ※なお、ローツェ西壁のスペイン隊は今プレシーズンに他の2隊のエベレスト隊の活動終了後という条件でエベレスト東南稜からの許可も併せて取っている。
- また、アマダブラムの許可を取っていた西ドイツ隊はキャンセルしている。

新刊図書一覧

- ①浜地利男, 「インパール最前線」, 叢文社,
1980・1, 331P, 1,500円。
- ②西田龍雄, 「西夏文字」, 玉川大学出版部,
1980・1, 224P, 2,800円。
- ③八幡一郎, 「北アジア考古学」, 雄山閣,
1980・1, 420P, 5,800円, (八幡一郎著
作集。第四巻)。
- ④影山剛, 「漢の武帝」, 教育社, 1979・10,
244P, 600円。
- ⑤オリエント学会・編, 「日本オリエント学会創
立二十五周年記念・オリエント学論集」, 刀水書
房, 1979・11, xvii+721P+iii, 13,000円。
- ⑥千葉茂樹, 「マザーテレサとその世界」, 女子
パウロ会, 1980・1, 196P, 700円。
- ⑦毛尔盖・桑木旦ノ著, 「蔵文文法概説」, 成都,
四川民族出版社, 1979・6, 257P, 0.44元=
220円, (チベット語板チベット語文法書)。
- ⑧スウェン・ヘディン著/雁部貞夫・訳, 「カラ
コルム探検史(下)」, 白水社, 1980・1, 377
P+vi, 3,800円, (ヘディン探検紀行全集・別
巻2)。
- ⑨E・ユック著/後藤富男・他訳, 「韃靼・西藏
・支那旅行記(上・下)」, 原書房, 1980・2,
上巻=439P・3,600円, 下巻=472P+22P・
3,600円, 解説=前嶋信次, (ユーラシア叢書
31・32巻。昭和14年・同書生活社版の復刻版)
- ⑩高須茂, 「山の民俗誌 - 山河行六〇年 - 」,
角川書店, 1980・1, 258P, 840円, (角川選
書109)。
- ⑪井上靖, 「天平の甕 - 集英社カラー版 - 」,
集英社, 1980・1, 181P, 2,800円。
- ⑫内蒙古語文学歴史研究所文学研究室・編/錢
舜娟・責任編集, 「蒙古族民間故事選」, 上海,
上海文芸出版社, 1979・5, 399P, 1.25元=6
25円, (初版12万部。少数民族民間文学叢書)。
- ⑬《満族簡史》編集組, <満族簡史>, 北京, 中
華書局, 1979・8, 273P, 0.84元=420円,
(初版9,300部, 中国少数民族簡史叢書)。
- ⑭四谷龍胤, 「或る登山家の半生」, 岳書房,
1980・1, 312P, 1,600円。
- ⑮B・クラノフ著/吉田衆一訳, 「新シベリア
紀行 - 9,300キロの旅 - 」, 合同出版,
1980・1, 216P, 1,400円。
- ⑯那谷敏郎・著/大村次郷・写真, 「イスタンブ
ール案内」, 平凡社, 1980・2, 144P,
550円, (平凡社カラー新書125)。
- ⑰ビル・マーチ著/竹田雅子訳, 「現代氷雪登攀
技術」, 岳書房, 90P, 950円。
- ⑱丸山健人, 「高層の天気 - 700ミリバール・
天気図の見方書き方 - 」, 岳書房, 1979・11,
158P, 800円。
- ⑲カーシーナート・シン著/荒木重雄・訳, 「わ
たしの戦線」, 発行・めこん/発売・文遊社,
1980・1, 249P, 1,300円, (アジアの現代文
学・インド)。
- ⑳玉貫光一・編著, 「シベリア東部生物記」,
国書刊行会, 1980・2, (A5), 5,800円。
- ㉑ロマン・ロラン著/宮本正清・訳, 「伝記Ⅱ -
ラーマクリシュナの生涯・ヴィヴェカーナン
ダの生涯 - 」, みすず書房, 1980・2,
530P+16P, 2,500円, (第三次ロマン・ロラ
ン全集・第15巻)。
- ㉒三原幸久・監修/坂田貞二・他著, 「インド・
スリランカ・パキスタン・ネパール」, 研秀出版
1980, 139P, (「世界の民話全十六巻」中,
第十一巻, 一括販売)。
- ㉓メンドス・ピント著/岡村多希子・訳, 「
東洋遍歴記・2」, 平凡社, 1980・2, xii +
360P, 1,500円, (東洋文庫371)。
- ㉔J・スチュアート著/熱田俊貞・賀川豊彦訳/
佐伯好郎・校訂/森安達也・解説, 「東洋の基督
教 - 景教東漸史 - 」, 原書房, 1979・7, 4
40P+11P, 4,800円, (ユーラシア叢書・第29
巻/S15年豊文書院版の復刻版)。
- ㉕井上靖・林良一・並河萬里, 「ペルシアの聖都
」, 講談社, 1980・1, 159P, 3,800円, (世
界の聖域。第 巻)。
- ㉖山折哲雄他著, 「山岳宗教」, 春秋社, 1980・
1, 196P, 1,000円, (現代宗教・2)。

HIMALAYA NEWS

②⑦ 平等通照, 「盤谷通信 — 愛は死を超えて—」,
印度学研究所, 1980・, 420 P, 2,500 円,
(同研究所=横浜市港北区新羽町2876)。

②⑧ ビルジウ・ゲオルギウ著/中谷和男・訳, 「ア
ラーは偉大なり — マホメットの生涯 —」, サ
イマル出版会, 1980・2, 264 P, 1,200 円。

②⑨ J・スペイン著/勝藤猛・中川弘・訳, 「シル
クロードの謎の民 — パターン民族誌 —」, 刀
水書房, 1980・2, 309 P, 1,600 円, (刀水歴
史全書6)。

③⑩ 川崎隆章・編, 「会津の山々・尾瀬」, 木耳社,
1980・1, 389 P, 5,500 円, (復刻版)。

③⑪ 増永迪男, 「日本海の見える山」, 北陸通信社,
1979・10, 264 P, 1,400 円。

③⑫ 藤田弘基, 「ランタン山群」, グラフ社, 1980・
3, 24 P, 800 円, (カラーアルバム, No.28)。

③⑬ 渡部雄吉, 「揚子江下り」, グラフ社, 1980・
3, 24 P, 800 円, (カラーアルバム, No.29)。

③⑭ L・ルヌー, J・フィリオザ著/山本智教・訳,
「インド学大事典・第二巻 — パラモン編 —」,
金花舎, 1979・11, xxiii + 588P, 8,000 円,
(叢書・仏教文化の世界・9, 同社=東京都新宿
区戸山町12)。

トピックス

カンチェンジュンガ偵察隊出発 山森隊長ら7名 カトマンズへ

総経費1億3千万円、世界で最初の8,000 m峰
3座の縦走をめざしてH A Jが派遣するカンチェ
ンジュンガ学術遠征隊の成功を期する上で重要な
役割を担う偵察隊が2月20日、3月1日にそれぞ
れ出発した。

偵察隊は、山森欣一隊長以下、菊地薫副隊長・
山田・片岡・若尾・角田・八嶋の各隊員から成る。

既に、菊地・片岡両隊員は昨年からカトマンズ
入りして渉外・物資調達等に当たっている。

偵察隊はカトマンズで必要な準備のあと3月15
日前後に出発し、ダランバザールから約25日間の
キャラバンをスタートさせ、4月10日前後にヤル
ン氷河上5,500 m付近にB・Cを設置する予定で

ある。

偵察隊は、アプローチ事情の調査、アイスフォ
ール、上部ルートの把握、シェルパの確保など、
81年本隊派遣に必要とされる多くの事がらについ
て精力的な調査・準備活動を行い、カトマンズ帰
着は6月上旬の予定である。

偵察隊の行動は本紙で逐一報告するが、現地連
絡先は下記なのでぜひ激励の手紙を出してほしい。

C/O Express Trekking

P.O.Box 339 Kathmandu Nepal

インド・ヒマラヤ集会

このたび、インド政府観光局、エアー・インデ
ィアの後援により、インド登山財団幹事ジョギン
ダール・シン氏(中佐)を迎えて下記により、公
式集会を開催します。登山およびトレッキング事
情について研究するよい機会ですのでぜひ参加し
てください。

記

1. 日 時 昭和55年3月23日(日)15時~17時30分
2. 場 所 エア・インディア会議室(東京都千代
田区有楽町1-8-1, 日比谷パーク
ビル6F 電話03-214-7631, 日
比谷交差点)

3. 内 容

- ①インド・ヒマラヤの登山・トレッキング事情
15:00~16:30
- ②質疑応答 16:30~17:30

4. 参加申込

至急、電話にて下記へ。会員は無料です。(一
般500円) H A J事務局(03-367-8521)
※なお、仙台(3月17日)、宇都宮(3月18日)
名古屋(3月20日)、大阪(3月21日)の各会
場については、地域会員あて別に通知いたしま
した。いずれも18時~20時30分です。

※3月23日18時からJ・シン氏のサヨナラパー
ティを会費3,000円で開きます。くわしくは事
務局へ問合わせて下さい。

- ◎名古屋会場の変更: 3月20日14時~16時30分
愛知県中小企業センター、名古屋駅より徒歩5
分

集 会 報 告

インド・ヒマラヤの集会

○日時 昭和55年2月17日9時30分～12時

○場所 愛知県中小企業センター研修室

○参加者 25名

新たに解禁されたガンゴトリ山群を中心として
インド・ヒマラヤの地域事情について勉強した。
講師は、先年ガンゴトリ地域に入った稲田定重氏

(専務理事)で、見事な未踏の山々のスライドを
まじえて話が進められた。

また、折から来日中のフィダ君も出席し、ラダ
ックの最新事情について話しがあった。
できればもっと時間をとって十分な質疑応答があ
れば良かったと思われる。

広島ヒマラヤ集会

○日時 昭和55年2月23日午後1時～6時

○場所 R C C文化センター(広島市橋本町)

○内容

1.地域事情 インド・ヒマラヤ

講師 稲田定重氏(HAJ専務理事)

インド・ヒマラヤの概況、登山事情、申請の
方法などについて勉強した。

特に、注目されているガンゴトリ山群について
は、豊富なスライドを使って沢山の山々が紹介さ
れ参加者の目を奪った。

2.カラコルムの研究法

講師 西村清一郎氏

永年にわたって、コソコソとカラコルムについ
て研究され、また、自身冬のヒンズークシュに初
めて入った西村氏から深味あるお話があった。

特に、資料の整理方法、文献を縦横に駆使した
ユニークな研究方法は氏の独壇場であり、時間が
いくらあっても足りないほどであった。

氏の蓄積された研究成果を一度多くの方々へ公
表の機会をつくれればと考えさせられた。

会費変更についてのお願い

HAJの事業は現在飛躍的に増大しており、
名実ともに我国におけるヒマラヤ・センターを
めざして懸命の努力がなされています。

昨年秋からの常勤職員の設置、ルームの開設
各地での日本ヒマラヤ会議開催、国際交流によ
る研究会開催、レファレンスサービス開始。更
に本年度より年報の配布等々、最大限の会員サ
ービスが展開されています。

これらの各種事業を実施するためには多額の
経費を必要としますが、とうてい会費収入だけ
では不可能であり、様々な手当をしながら維持
しております。しかしながら、社団法人発足を
間近に控え、更に会員サービスの抜本的向上を
なすためには、会財政の基本となる会費収入の
確立が最も重要になってきております。この件

については去る12月の常務理事会において真剣
に検討され、最低限の措置として、現行会費を
55年度から2,000円アップし、6,000円にせざ
るを得ないとの意見が提出されました。

ちなみにHAJの全財政規模は現行会費4,000
円になった昭和50年度に比較して約5倍に拡大
しております。

つきましては、今後とも更に一層の会員サー
ビスの向上と会財政の強化安定に全力をつくし
ますので、すばらしいHAJを建設するために
会費変更について、会員各位の御理解をお願い
する次第です。

なお、正式には55年4月の総会において提案
し、御承認をお願いする運びとなります。

1979～80

ヒマラヤトレッキング・セミナー

未知なるジュガール山群

＝バイラブクンド＝

隊長 岩水 竜峰

協会主催による本事業は、昨年の12月30日から1月16日までの18日間、ネパールのジュガール山群のバイラブクンド一帯において実施された。単にトレッキングのみではなく、セミナー形式を取り、講師より幅広いヒマラヤ学を学び、多くの成果をあげて帰国した。

隊の概要

○ 隊の名称

日本ヒマラヤ協会 ジュガール山群踏査隊

○ 目的

- (1) 中部ネパール・シュガール・ヒマラヤ山麓の踏査（外国人として初めて入域）
- (2) チベット人部落の調査
- (3) トリプバン大学訪問
- (4) ネパール政府高官との懇談

○ 隊の構成

隊長	岩水 竜峰 (33歳・岐阜)
副隊長	小林 英見 (71歳・神奈川)
講師	五百沢智也 (46歳・山形)
隊員	設楽 芳夫 (67歳・東京)
"	井上 英新 (47歳・)
"	佐藤 圭司 (43歳・神奈川)
"	米山 和男 (54歳・)
"	米山 方子 (53歳・)
"	柳沢須佐男 (65歳・)
"	白前 和良 (22歳・山形)
"	鈴木 孝 (27歳・宮城)
"	蘭田 芳子 (28歳・栃木)

"	石崎 貞子 (46歳・北海道)
"	由良 珠江 (40歳・)
"	小野木三郎 (40歳・岐阜)
"	安藤 志郎 (32歳・)
" (現地参加)	戸部 洋子 (26歳・宮城)
"	戸部 玲子 (23歳・)
"	榊原 幸子 (24歳・)
"	片岡 邦夫 (25歳・高知)
サーダー	バサン・ソナム (39歳・ナムチェ)
シェルパ	サムデン・シェルパ (23歳・ビグ)
"	アンドルシェ・シェルパ (23歳・ソロ)
"	ナワン・ノルブ (21歳・ロールワリン)
コック	デジマードル・シェルパ (18歳・ソロ)
キッチンボーイ	アンダレ・マガル (16歳・ソロ)
"	マンマードル・タマン (21歳・ティマール)
ポーター	35名

総計 61名

好調なスタートと思われたが

今回のトレッキングは、すべり出しから非常に好調なスタートを切った。早々と未地なるジュガールのバイラブクンドが、ネパール滞在の菊地氏の努力で決定し、講師にもヒマラヤ学の大家五百沢智也氏が快諾され、富士山で実施した合宿時には19名もの参加希望者があったことは、この計画を推進する上で大変好都合であった。結果的に参加者が16名と1グループをつくるのに最適な人数となり、混雑が予想される正月路線の中においても、比較的早く飛行機の席を確保することが出来

た。もちろん、エア・インディア名古屋の耕井氏の努力があったからこそではあるが。隊長としてそれ程苦労することなく、出発をむかえたが、ただ一つ、年末に入ってからドル相場の変動には頭を痛めた。

禍い転じて福となる

12月30日、重い荷を肩に東京エアシティ・ターミナルに10時に集合、初めて顔を合せる人も多く、何となく不安であったが、会ってみれば旧知の如く話がはずむ、しかし、10時を過ぎてもA嬢は、なかなか姿を見せてくれない。心配のあまり電話をしてみると、昨日出ていますとのこと。仕方なく、係員に尋ねると、それらしき人が成田でまっていますとのこと。あれ程、東京の箱崎といったのにと憤慨してみても始まらない。さあ、成田に行こうとリムジンに乗る。やはり、集合時間、場所には気を付けたいものです。

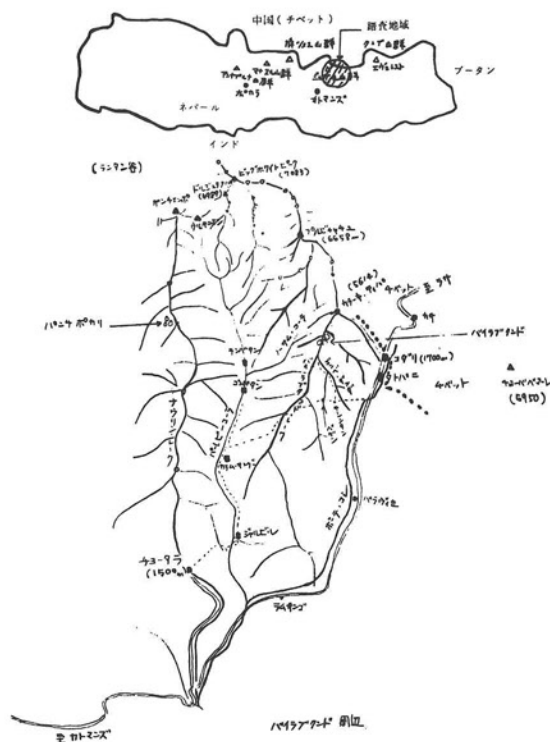
機は、様々な想いを乗せて成田を飛びたった。明朝2時にはデリーに着く予定であり、順調に飛行を続けている。……突然「デリー空港濃霧のため、このまま飛行を続け、ボンベイに着陸いたします」と機内アナウンスが告げた。お互いにバンコック以後深い眠りに入っていたため、聞いた人

も聞かない人もいるようであったが、前の席にいた井上さんが、私に知らせてくれた。日本語のアナウンスの前に英語のアナウンスがあったようで井上さんはそれを聞いていたようである。時計をみるとすでに3時を廻っている。これはえらいことになったと思ったが、空の上ではどうしようもない。8時のRAには間にあいそうもないし、今日中にKTM（カトマンズ）に入れそうもない。困ったなあと思っているうちに、ボンベイに着陸し、トランジットルームに閉じ込められてしまった。地上オペレーターが英語で説明しているがどうもよくわからない。

井上さんは、さかんに英語で話をつけようとしているが、ルーム内が混乱し、係員も右往左往し、話が見つからない。しかし、デリーに飛び飛行機があれば俺達を一番に乗せろと約策を取りつけてくれた。……朝食のサービスが始まり、なんとなく落ち着いてきた。……又、戦争が始まった。どうも闇にじょうじて、ボーディングカードが配布されているようだ。遅れをとってはと急いだが、後の祭り、互いに日本人の団体どうしでいやな思いであったが、席の取りあいである。……我々は最後に残されてしまい、ジョンボリ。又、井上さんが頑張って、係員と激論を交わした。……とうとう我々が勝った。あれ程もう席はないといっていた係員が最後の切り札を出した。見ると1等席を16枚……機はボンベイを離陸した。時計は9時を廻っていた。延々5時間の戦いであった。戦いの後の食事はうまかった。全てが1等の扱いである。禍い転じて福となる。ジャンボは何もなかったようにデカン高原の上空を飛んでいる。

5人はデリーに

時間的にみれば、もう今頃は、KTMの街の中でひやかしている時間であるが、まだデリー空港で右往左往している。全ての飛行機がボンベイに廻ったために、ここも大混乱で、なにがいったいどうなっているのかよくわからない。とにかく我々が契約している現地エージェンツI&Sの職員を探す但那らしい人物もいない。電話をしてみるが、日本の方式と異なり、電話器の中へお金をすい取られるようではなかなかかからない。ああ、



ここはインドだ。あせるなあせるな。……スリー
ラ嬢がやって来た。全てを彼女にまかせた。……
まだ、RAの最終便があるようだ。喧騒の中で通
関を済ませ、出発ロビーに急ぐ、席は11しかない、
5人が残るか、それとも明朝の1番で全員が行く
か。2つに1つ。とにかく、KTMに行かないと
ランジャン氏も心配するだろうから、五百沢氏他
若い人5名残り、11名は機上の人となった。イン
ド独特の雰囲気の中で、皆がなんとなく疲れを感じ
た。今日1日、夢のように過ぎた時間を振り返
えることなく、ランジャン・ハウスの床についた。
残留組5名は翌日、夕方おそくKTMに入り、や
っと全員の顔が揃った。過去を振り返りながら1
日の遅れはまだラッキーの方だ。カルカッタで3
日もまったよと楽しい話題が始まった。

国境の村コダリへ

1月2日霧深い早朝のKTMをあとにコダリに
向う。現地参加者4名、サーダーのパサン・ソナ
ム、シェルパ、コック、キッチンボーイ、それに
いくらかのポーター総勢35名程が乗り込んだ。

例によって、窓は割れ、ガタガタのバスではあ
るが、エンジンは快調のようである。バドガオン
まではトロリーバスと並行して走り、8時30分頃
ヒマラヤの展望台ドウリケル到着、さっそくセミ
ナーを開く、畑の中で西はアンナプルナからクン
ブヒマールまでの大展望を学んだが、あまりにも
峰々が多く、一つ一つ親切に教えていただいたが
今はもうその記憶に乏しい。あまりにも、ヒマラ
ヤは大きくて美しくすぎる。

我々が走ったこの道は、通称コダリロードと呼
ばれ、KTM・コダリ間104km、ラサまで延びて
いる。1966年に中国の援助により完成した。今
はこの道路を通して中国の宣伝活動が行なわれて
いるようだ、パラヴィセの河原で多数のカラー印
刷物の紙片を拾った。文字は全てネパール語であ
る。

国境の村コダリは、奥深い山の中にあった。お
互いに国旗を掲げ、ゲストハウスらしき建物が数
戸、橋をはさんで建ち、兩岸の橋のたもとには両
国の兵隊が銃を持って立っている。中国側は直立
不動、ネパール側は我々に愛敬を振りまいている。

国情のちがいをを感じる一コマである。しかし、国
境といった緊張感はあまりなく、付近の景色から
察して、パンダでも居そうだなと、かつてな空想
をめぐらした。

少し下った所にタトパニという温泉があり、一
夜の宿となった。この温泉は、ノー・グットで
あり、誰も入らなかった。

外国人として始めてか

我々がめざしたバイラブクンド周辺は、ジュガ
ール山群とロールワリン山群の間の地域で、どち
らかといえば、ボーテ・コシにより分断されたロ
ールワリンよりもジュガールの前衛といった感じ
が強く、ジュガール山群踏査という名称を使った
が正式にジュガールに入る地域かどうかはさだか
でない。しかし、それ程まちがっていないように
思う。しかし、チョータラへ登る最後の昼食時に
この方面を遠望した限りにおいては、カラ・ネ・
ティパ(5,614m)を頂点とするバイラブ山群(正
式な名称がないので仮称とする)は、パレビ・コ
ーラの支流ノースム・コーラによって、北のジュ
ガールと分断されているように見えた。したが
って、プルビチャよりの国境稜線はかなり低くな
ってティパによっているように思われる。かつて、
この周辺は、チベットとの交易の間道として利用
されたと聞くが、はたして、どのルートが使用さ
れたかは定かでない。

本題にもどってみよう、はたして外国人として
我々が初めてであったろうか。帰国後多くの文献
を読みあさってみたが、バイラブクンドに入った
記事はついぞお目にかかれなかった。尾根一つ隔
てた、パンチポカリには、日本の深田隊も有名な
ティルマンも入っていることがわかった。

先頭はドクター、最後は坊主

タトパニで一夜を明かした我々は、ポーター35
名、総計60数名の大キャラバンとして出発した。
本隊は、先頭をドクターの設案先生、最後は坊主
である岩水が務めた、これは富士山合宿の時と同
じである。タトパニよりラルツまでは、コダリロ
ードを通り、一本のつり橋を渡って、いよいよト
レッキングに入った。久しぶりに歩くネパールの

道、チベットの部落、カンニ、ゴンパどれもこれもなつかしく、足どりも軽い。皆思い思いに、カメラに、スケッチに興じている。五百沢先生よりフィールドノートの作り方を習い、即ノート片手に実践している隊員もいる。こうして楽しいキャラバンはゴンベダンドを登り始めた。ダンドとは雪線下の山脈という意味だそう。途中、チンタン、ゴンベダンド・カルカを経て、2日半後にバイラブクンド直下のカルカ（約4,000m）に到着した。ゴンベダンドにしるバイラブクンドレクにしる、意味からして雪のない山脈ということであるが、ことの外雪が多く、2日目からは完全に雪の道であった。

協議の末、ここから上部に登ることは、隊員の体調・ポーターの装備からして困難であるとの観点から、とりあえず最終キャンプ地と決定、翌日バイラブクンドに登る。サーダーはゴンパタンに下るルートの偵察をすることとし、午後自由行動とした。

バイラブクンドは雪の中

翌日、体調の良い五百沢以下9名は、バイラブクンドに登るべく、早朝出発した。他の隊員は、テント地周辺を散策することで今日一日ゆっくり停滞することとなった。我々は、まず左に4,394mの岩峰を目ざしてコルまで登り、バイラブクンドに入った。クンドの一帯は深い雪の中にあり、どこが湖か、どこがルートかよくわからないが、聖地らしく、所々にチョータレが立っているため、それを目ざして、進む以外方法がない。時に動物の足跡があり、シェルパがうまくルートを取ってくれるが、それでも腰までのラッセルの場所も多く、なかなか目ざすコルまでは遠い。途中で、佐藤氏の容態がおかしいと言うドクターからメッセージを受け取ったが軽い高山病位だろうということとで引返すこともしなかった。ただ、柳沢氏のみ心配され、シェルパとともに下山された。

我々は、広いクンドの雪原を登り切り、チョルテンのあるコル約4,300mに着いた時、すでに時計は、2時を廻って、ノースム・コーラの北の峰々は深い雲の中にあった。楽しみにしていた、ジュガールの山々の展望はきかず、ただ東の方のみ、



バイラブクンド最高到達地点
(約4,200m)

明るい陽光がさしていた。カラーネ・テッパは、まだここから2日は充分にかかるだろう。

へり要請

佐藤氏の容態は、我々が考えていたよりも悪化していた。偵察から帰った片岡及びサーダーは、すぐにタンカを作り、ドクターの指示によりゴンベダンドカルカまでポーターとともにおりた。片岡は、その足で一気にコダリまで下山し、KTMに電報を打つべくポリス・ステーションに依頼した。我々が、これらの事情を知ったのは、バイラブクンドから帰った夕方であった。柳沢のメールによれば、病人は意識不明とのことであった。

翌朝、我々は、とりあえずカルカまで下山し、病人を安全におろすことが最大の責務であった。うまく、ヘリが飛来すればよいが、もし、来ない場合……いても立ってもいられないが、ここは全て、ドクターの指示に従う以外方法がない。

11時に片岡の手配したメールランナーが、約5時間位で、タトパニから登ってきた。時間じ頃、ヘリの爆音が、東の空から聞えてきた。来た。ヘリが来た。片岡の手配したヘリが来たのだ。一生懸命、手を振った。赤いヤッケを振った。日の丸の国旗を振った。しかし、バイラブクンドの上空を旋回するのみで我々の視界から消えてしまった。……違うヘリだろうかと思案していると再びヘリが登って来た。今回は確実に我々に近づいている。

間違いない、前回よりも多くの物を目印とした。

ヘリは12時20分、小さな雪面に、確実に着陸した。まさにアクロバットのな着地である。それも一回で確実におりた。ネパールの軍のパイロット、ランジャン氏、それに片岡君に心から礼をいいたい。

佐藤氏と米山氏は、5分後、確実にヘリの座席に身を横たえて、我々の視界から消えた。

その後、我々は、バイラブクンド越をあきらめ、テシントンに下山し、隊を2隊に分け小林他5名は、1月9日KTMに入った。

我々は、テシントンより、バガン、カラムサングー、ジャルビルを経て、予定通り、1月12日チョータラより、バスでKTMに入って、このトレッキングを終えた。

期間中多くの人達に世話になった。特に片岡氏

には、韋駄天の如く走りまわっていただいた。又、隊員として参加されながら、多くの病人を夜を徹して診察していただいた設楽先生、軍のヘリを緊急に手配していただいたランジャン氏、計画の最初から最後まで面倒みていただいた菊地氏、講師であるとともに我々を引っ張っていただいた五百沢先生。又、ポーターをよくまとめ、的確な判断をしたサダーのパサン等、多くの人達に心から謝意を表したい。

佐藤氏も帰国後、少しの間入院されていましたが、医者がおどろく程早く回復され、今では元気に勤務されているとか。

最後に、参加した人々が、帰国後元気に、以前の生活にもどられたことが、全て終了した証であると思う。

バイラブクンド見てあるき

インストラクター 五百沢 智也

全員が初めての場所なのだから、もともと、どこで何をどう調べるといふ具体的なプランは作らなかった。それよりも、どんなところかという興味が大きく、ために、今回のセミナー・トレッキングは何でも見てやろう式で、テーマはメンバー各人の好みしだい、ただし格別の義務やノルマは無しとした。

しかし、ものさしやメジャーテープ、温度計などの簡単な観測具は適宜用意し、計測や観察したデータを何でも記録してやろうというメモ魔の心得は伝授した。

コースが、ゴンベダダ経由で氷河湖のバイラブクンド(約4,000 m標高)まで登り、後は裏側の谷の村々をまわって下山するというものなので、まずはヒマラヤの自然と住民の生活を手あたりしだいに観察記録することとした。その仕事をすすめるうちに、いつしか自分の興味の中心もひとりでにわかってくるのではないかと期待する、テーマ発見の旅となることを期待した。

それでも、ティベット系住民の住むと言われているテンパタンやゴンパタンの村はすこしじっく

くり観察してみたいと思い、住民とのコーディネートに威力を発揮するポラロイドカメラとそのフィルムを用意してみた。

実施の状況は、別稿で岩水氏の報告された通りであるが、積雪とアクシデントのためにテンパタンやゴンパタンの調査は断念せざるを得なかったし、合わせてフライトのトラブルのために日数が減ったこともあり、トレッキング全体があわただしくなり、決められた日に帰ることに全力をそそぐこととなってしまった。つまり、ふつうのトレッキングと大同小異に終わってしまったのである。やはり調査とか観察をみっちりやるためには、通常日程の2倍の時間が必要である。

ただし、インストラクターとして嬉しかったことは、今回のメンバーの強い個性と特技がそれぞれプラスの面にだけ機能してパーティの力を倍増させたこと、また一方でトレッキングそのものを非常に楽しく豊かなものにしたことであった。なかでも設楽ドクターの日夜にわたる御活躍にはまったく頭がさがるばかりで厚くお礼を申しあげたい。また柳沢さんや片岡氏の超人的な働きはびっ

くりするほどすばらしいものだったし、さっそくヘリで飛んでくれたランジャン氏にも感謝したい。いきなりボンベイにとばされたパーティに1等席をもたらしたのは井上氏の口角泡を飛ばす活躍だったし、連夜の村人との交歓会がうまくいったのは、藺田さんと岩水リーダーの能力と積極性のおかげだし、シェルパ達があれほど働いたのは石崎・由良・両戸部・米山・榊原・藺田の女性メンバーの魅力のせいだったし、小野木・安藤両氏の植物観察はパーティ全体のレベルアップにつながると共に、この2人と白前、鈴木両君の愉快的言動はパーティ全体の潤滑油となった。ジャパニ・シェルパとしての片岡氏と鈴木君の働きもめざましかった。佐藤氏は不幸にも体調をくずされたが、それまでは小林氏、米山氏と共に何でも見てやろうパーティの一員としてそれぞれに写真に録音に精一杯みごとな御活躍であった。このようにパーティとしてうまく機能したのは必ずやメンバーの皆さんの見えない努力があったからに違いない、誌上を借りてあらためてお礼申しあげたい。

観察と記録の結果は、イラスト案内図でざっとまとめてみた。ネパールの首府カトマンドゥからティベットへ抜ける、アリニコ・ラジ・マルガという自動車道路の中国国境の村コダリから西に登り、ジュガール・ヒマラヤの東南端部の氷河湖バイラブクンドからいったん中途のテシタンまで戻り、尾根を横断してバレピー・コーラをくだり、下流のジャルビレの町から西の尾根の上の町チャウタラに登って迎えるバスにのるというコースだ。図の右下から左へと順に追いながら眺められたい。コース一帯の地形は地図と空中写真から、ジュガール・ヒマールの遠景は空中写真のみからまとめた。野帳の記録はもっとこまかくたくさんあるのだが、ここではコースのうちの宿泊地点、昼食地点を中心にその概略を示すだけにとどめた。

ゴンベ・ダンダの尾根でびっくりしたのは、この尾根の3,000 m～3,500 m一帯の高木林がすっかり山火事にやられて樹幹だけのものになっていたことだ。

村の人たちとの交流のきっかけにポラロイド・カメラの有用なことは以前から知っていたが、今回は全家族がきそって盛装して出てくるほどのモ

テかたであり、写真が家族の貴重な財産として取扱われているネパールでのポラロイド写真は、村人たちにとってそうとうにメリットがあるものである。このポラロイドを生かすには、やはりもっとたっぷりとした時間が必要である。ポラロイド、夕食後の火を囲んでの唄と踊り、酒やごちそうなどを多角的に利用してのさりげない、そして密度の高いアプローチと接触で1つの村に4～5日の時間をかければ、かなりいろんな知識を得ることができよう。

バカンやゴルの村人達の話の総合してみると若い嫁さんたちはごく近い村からとついできているが、おばあさんがた(80歳代)の多くはラプタンなどティベットから嫁に来ているようだ。20歳前後の結婚とすれば、1910年から1920年にかけてであり、日本でいえば大正年間ネパールではラナ専政時代のことである。ただし、村人達はティベットから来たと言うだけで、ティベット人つまりボデであるとは言っていない。

私達が歩いたのは、ちょうどジャガイモ(種イモ)の植えつけの時期、牛によるスキ耕の時期であり、その作業の様子を見ることができた。イネ、トウモロコシ、シコクビエは切りとった後ばかりでこれらは切株ばかりであったが、アブラナは花が咲いていた。テシタンの作物はじゃがいもと小麦だけで、家畜は牛、にわとり、山羊、羊それにヤクと牛の雑種のゾウであった。ネパールの民家は1色～3色の壁の塗りわけがなされているが、テシタンでは茶色はバカンの土、白はドゴム(アルマシンの近く)あるいはエルマシニングから運び、青灰色はドゴムの土を使うといったぐあいである。

このテシタンはゾウを飼っていることでもわかるように、交易で収入をはかってジャガイモと小麦以外の食糧や消費物資を購入しているとのことだった。

バレピー川の魚の奇妙な釣り方は図の中にも書いたが、糸だけでしるような釣り方は眼と反射神経の勝負であり、原始人なみのすぐれた神経が必要であると思われる。

セミナートレッキング

コタリ=バイラブクンド=チャウタラ・コース

イラスト案内図

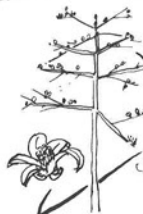
Jan. 1980
R. Jozawa



Goruの家族



チャウタラ下にあった
4階建の洋裁店



Scarlet-breasted
Sunbird?
Nepal
Sunbird?
Fire-tailed
Sunbird?

シマルレの木 (*Salmalia
malabaricum*) の花、白い花
に赤い蜜を吸っていた。

このあたりで元の
金魚鉢が糸をたれ
ていたが、包みはな
く、釣り糸でルーフを
作り、身の中を通
るうとする魚を捕
るためと釣りとい
うすごい釣り。

ボタラ
Chautara

Gorji Aaka

バス停
バス

ここがトレッキング
は、終了した。

草地の尾根の上に
ほたけの貝の殻が
散らばる。良い休養場。
シムカ「シムカ」マ
マの田舎がよい。
チャウタラ町の北
山麓も見える。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

カトマンドウに
至る。

Daldi

牛、水牛

High School

Jalbire

Kubenda Khola

Sleeping Vishnu 堆肥

11日夜の泊地

水田

Balephi

72m

Sun Kosi

Lamosangu

Barahbise

Barahbise

Barahbise

Barahbise

Barahbise

Barahbise

Barahbise

Barahbise

Barahbise

Barahbise

10日夜の泊地

(水田)

Gatlige

1130m

Kalam Sangu

1080m

Sanaute

1140m

Shikinese

1170m

1日目の登り地蔵 (釣針)

スレート屋根

正月菜 (ライオン)

たまご (ヘビ)

いす (アール)

シマルレの木

ハイバハカ (400リ)

ハイバ、アークンゴリア

ポロイセタ、シク、カラス

全部で55戸、うち7戸が商店

洋服、衣料品、雑貨など

人口約200人、ネパール人、

バクン、チネリ、タマシなど

6~7歳の群、置換

33の虫

(970m)

田へ進肥を運

きた5の羽が

新く

新く

新く

新く

新く

設置ドクナ 村民と診療。

足化用器の32人、(ドクナ、ラッパ

の見える谷に)

分山色

12480m

山

2640m

10日の屋敷1世

Goru 870m

Ghyphche

2075m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

設置ドクナ 村民と診療。

足化用器の32人、(ドクナ、ラッパ

の見える谷に)

分山色

12480m

山

2640m

10日の屋敷1世

Goru 870m

Ghyphche

2075m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

設置ドクナ 村民と診療。

足化用器の32人、(ドクナ、ラッパ

の見える谷に)

分山色

12480m

山

2640m

10日の屋敷1世

Goru 870m

Ghyphche

2075m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

設置ドクナ 村民と診療。

足化用器の32人、(ドクナ、ラッパ

の見える谷に)

分山色

12480m

山

2640m

10日の屋敷1世

Goru 870m

Ghyphche

2075m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

設置ドクナ 村民と診療。

足化用器の32人、(ドクナ、ラッパ

の見える谷に)

分山色

12480m

山

2640m

10日の屋敷1世

Goru 870m

Ghyphche

2075m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

2105m

Indrawati川で安藤氏が釣りあげた魚、子供達は Katti
Machha と言ったが Asla の養魚かなと思った。全長17cm。
餌はイクラ、豚ゴリで2振り目あたりで来た。魚に似くマウロコが大きい。

JUGAL HIMAL

Dorje Lhakpa Lempo Gang
6989

Shisha Pangma
8046 (Gosainthan)

Phurbi Chyachu
6658

5647 Kharane Tippa

Tempathang

Gompathang

Bhairav Kund

Bhairav Kund Lekh

Gombek Kharka

Jorpati Kharka

Kodari

Talopani

Bhote Kosi



Bakang's 家



Kodari ネパール、中国
国境の標



ゴンバダング
3050m

遠征学入門

XI

遠征準備あれこれ

— その5 —

西郡 光昭

言葉の問題

日本の遠征隊が時々語学力の乏しさを指摘されることのあるのはご存知のとおりである。かく申す筆者もえらそうにいえた義理ではない。これまでの遠征で英語力（だけでなくとにかく語学力）の無さに何度も失敗をし、その都度恥ずかしい思いのしどうしである。

英語なら多少なじみがあるからまだしも、アンデス遠征の時は本当に参ってしまった。スペイン語がこれまたまったくダメだからである。ス語に堪能な現地参加の隊員や在留邦人の助けを借りるまでは何とも心細い旅で、帰途もまた、腎臓を悪くした隊員に付き添って2人だけでメキシコ経由で帰国した時も言葉がわからず苦労した。帰国後思い返してテレビのス語講座をはじめてみたが長続きするわけがなかった。意志の問題なのである。

英語の失敗では恥ずかしいを通り越して可笑しくなってしまった思い出がある。——大学6年生の夏、上高地でキャンプしているわれわれの元へニュージーランドの若い医者が遊びに寄ったことがあった。どこかへ案内してくれと乞われて、たまたま暇でいた筆者がお共することになったものだ。岳沢から滝沢の下端まで行って滝を眺めて帰るたわいもないものだったが、失敗はその途中でおきたのだった。ひと休みしようとなつてタバコに火をつけるとその若いドクター、

「君は登山をするくせにタバコなど吸うておるのか」（と言ったのだと思う）

「タバコの害は知っているが止められないのである」（と言ったつもり）

などとやりとり（したつもり）しているうちに、彼の顔が突然、笑っているのか泣いているのか分らないような表情になって、そして何か言っているのである。その意味がまた当方には理解できずに困っていたが、彼がしきりに指さす足元を見て驚いた。筆者の登山靴がこの若きドクターのケミカル・シューズをガッチリと踏んづけているではないか。彼はこう言うていたのだった——「拙者の足がオスシの靴の下にあるのであるぞよ！」

国立民族学博物館の梅棹館長は、氏の著書の中で「生半可な現地語は調査活動のジャマにさえなることがある」という主旨のことを述べている。これをごく素直に受け取れば、学者さんはそれで良いかも知れぬが、われわれはそうは行きませぬ。現地語も覚えておくに越したことはないと思うのですがと反論したくもなる。現地語はともかくわれわれはとり敢えず英語にだけでも強くなりたいのだ。

くわしくは知らないが、われわれが英語に限らず語学に弱い原因の一つは日本における外国語教育にあるのだという。筆者も高校の頃、アメリカ帰りの英語教師に、われわれは英語を話す国民の発想のしかたはさっぱり習っていないと生意気を言つて長時間立たされた悲しい思い出があつて、そのせいか、その後いっこうに上達しないまま今日に至っている。

まあ、英語教育の問題を高邁に論じるのは良い

として、少くとも英語が苦手なために相手からあの蔑みの目で見られることのない程度の力はつけておく必要はあると思う。別に卑屈になることもなかろうが、こういう力は特にチームのオフィシャルな仕事を引き受ける時に求められることが多い。そこでトレーニングの（といってもこれまた大変であるが）目安として、何とか電話で正チャンなりとりができるぐらいにということにしてはどうであろうか。

遠征は人なり

得意でもないくせに言葉のくだりを長々と書いたりして恐縮。そのうえ話があちこちになってなおさらであるが最後なのでお許しあれ。

遠征は、それが企画され、実行されるにあたって、取り巻く人々とその渦の中に飛び込む人達によって内容も大きく変わるものだという感じを強くする。遠征の細かいノウ・ハウは、この情報過多といわれる時代にあって、しかも器用な人にはその修得がそれほど難しいものではあるまい（なんて書くとこのあと執筆される方々のお叱りを受けるかも知れないが）しかしその情報の活用やチームの運営となるとこれはもう人の問題である。

例えば担当とか役割分担とかいうのがあるが、それを決めただけでコトが首尾よく運ぶものではないことはご承知のとおりである。各々の受け持つ仕事がチームの目的にとってどう位置づけられるのかを常に把握することがメンバーにとっては欠かせない仕事であり、リーダーはそのメンバーによって齊らさせる情報をサム・アップしながらタクティクスを練るのだということを忘れてはなるまい。

生意気で分ったようなことを言うなとお叱りを受けるかも知れないが、筆者はそのもっとも悪い例を信州大学の遠征隊で経験している。前にも書いたアンナプルナⅡ峰遠征（71年）はアタック隊員の滑落、行方不明で不成功に終わってしまった。最後のトランシーバー交信ですでに意識の障害を思わせる状態だったので、このS隊員はおそらく脳浮腫をおこしていたのであろうが、実はこの高所障害はタクティクスのまずさによって引き起さ

れたと断言しても差し支えないものだったのである。そしてこのまずいタクティクスは燃料が底をつく事態になって無理に作られたものだったのである。燃料は、これまでの日本隊の報告を参考に、余裕をもって量を計算し準備をしたつもりだったのを良いことに、登山期間中は残量のチェックを含む管理にまったく注意を忘れていたのだ。この燃料の管理ミスが遭難の原因となったといっても過言ではなく、それを怠った担当者の責任もさることながら、その指示を忘れたリーダーの責任こそ絶大である。

遠征にたずさわる人、特にリーダーにはそれなりのセンスが必要だと思ったりするが、経験やトレーニングによって得られるものはそれよりはるかに大きかろう。とすれば経験や訓練にむけて熱意を傾注する人こそ重要である。やはり“遠征は人なり”である。筆者のごとく怠慢で、意志薄弱な人間は消えてしまった方が良い。

そして次のようなことだけはないようにお互いに心掛けるべきである。それは、一部の“やる気のある人間”がさんざん苦労して、やっと実現の可能性が見通せる段階になってノコノコ登場し、「やあ、君たち良くやってるなあ、それじゃこれからオレがリーダー（メンバー）としてやるからな」という具合にである。

H A J のカンチ計画のように巨大なプロジェクトでは特にそういうことがあっては困る。リーダーを中心に一人一人が遠征を組み立てる柱になって、ぜひ成功して欲しいと願わずにはいられない。

キシュトワール II

鈴木 修

先月号で予告したが、今月は、ヌン・クン山群とキアール谷の間にある未知の地域に踏みこんだ仙台商業高校OB隊の鈴木氏に登場していただいた。他の記録と総合しての解明はあとに待つとして、まず、氏の記録と考察を掲げることにする。

(稲田定重)

Dech; No. 1 及び氷河内院の山々

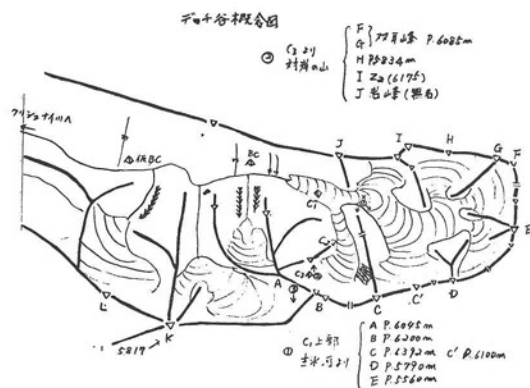
デチ谷

クリシュナイ川沿いの部落、メトワンに1953年のフランス、ヌン・クン隊長・Bernard Pierre のメッセージがある。「メトワンはすばらしい所だ……」部落の老人が、一葉のカードを宝物をさし出すしぐさで見せてくれた。

メトワンから約3km遡行すると、デチ谷との分岐点、チタパニに達する。だけかんばが樹立する牧草帯で、心休まる思いのする場所である。そして、クリシュナイ川の清流とデチ谷の濁流が、ほぼ同じ水量で交わっている。

デチ谷は全長約17km、盆地状の放牧帯を2カ所もつ比較的大きな谷である。左右岸の概観であるが、北側をつい立てのような岩壁が立ちふさいでおり、南側はゆるい傾斜の樹林又は草木帯となって立ち上がっている。

チタパニより約2km上流の台地に夏村がある。



地名をアルーといい、ギルマルク（木材と土石で造られた簡易住居）が10軒程あり、6月から9月上旬まで放牧民が居住している。彼等は、この季節以外ジャムー付近に生活の根拠地をもっているとの事である。

更に遡行すること約6km、途中4、5軒のギルマルクのある夏村を過ぎ、盆地状の草原帯、クワマツに到る。途中の夏村より、P6392mの西に位置するP6200mが遠望できる。白いらくだの2つのこぶを後方から眺めたような山容は、かなりの積雪を予想させ、後方が主峰のようである。

清涼な泉を持ち、涼風の吹き渡るクワマツには、ギルマルクが2軒、数人の遊牧民がかん高い口笛を吹きながら、羊ややくを誘導していた。

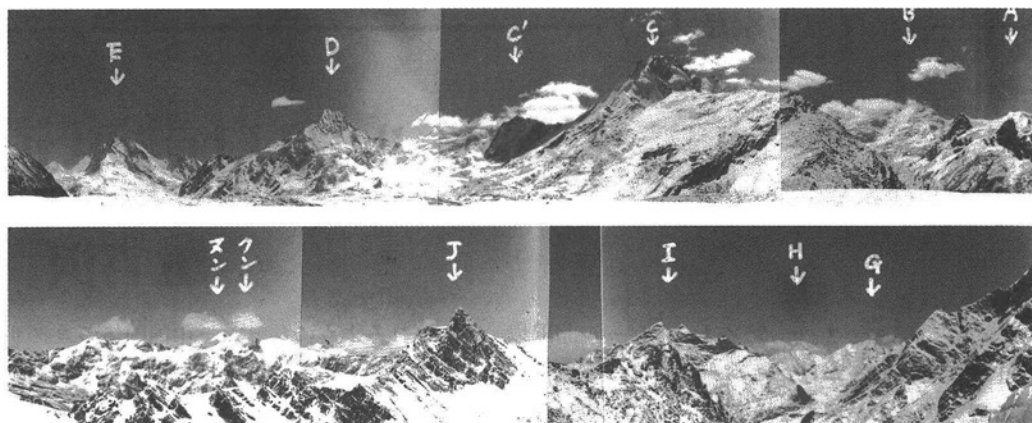
ここより約3km上流が氷河舌端となるが、途中の穴熊の出迎え、エーデルワイスと姫りんどうの群生する川添いに続く湿地帯が印象的だった。

氷河及びピーク

氷河は、モレーン帯で始っている。舌端は標高約3,900mであるが、モレーンは、P6,200mから北側に落ちている尾根に並行して、約4,300mまで延びている。

氷河は、P6,390mからの稜によって東、南に分けられている。南に向う氷河は、P6,392mとP6,200mのコルに向けてせり上っているが、約4,600m付近で切れ落ちている。そして、約4,200m付近から寸断され、まったく手のつけられない状態である。また、東に延びる氷河はP5,560(6,560m)へと、ゆるやかな斜度で延びている。

P6,392m(N8)は、約4,100mから姿を現わすが、周囲のピークに比して、圧倒的なボリュームを誇っており、北西面及び西面は落ち続ける雪崩と相まって、絶望的な岸壁を露呈している。そして、ピークよりやせ細った稜が北に延びているが、もしダイレクトに取りつくならば、このル



ートが可能性をにおわせている。また、ピーク西方は、小さな雪峰（主峰よりやや低いかな？）に連なり、P 6,200 mとのコルへと落ちている。

また、P 6,392 mは現地名を「ボルグマ」という。この呼称は、1977年東面より試登された岩手県大船渡海外登山研究会の諏訪木氏の報告にもあり、ほぼ間違いないと思われる。（「ボルグマ」は3つの谷の集まる所、または取り囲む所の意らしい。この意味は後述のP 6,560 mの存在とも関係があり、興味深い。）

P 6,200 mは、一見たおやかな雪峰である。しかし、北面はブロック崩壊の跡が生々しく、降雪の状況にもよるが雪崩の危険性を多分に含んでいる。このピークの西稜は比較的広く、かなりの積雪がある。

P 6,392 mの東に位置するP 6,100 mは、学研の「世界山岳地図集成、KISHTWAR」によると、北稜が記されているが、誤記と思われる。この稜は、P 6,392 mからのものであり、この部分に関しては「岩と雪38号付図、KRISH NAI地域と周辺」の表記が正しいのでなかろうか。

稲田氏の紹介にもあり、氏が疑問視されていたP 6,560 mの存在であるが、学研の地図には5,560 mと表示されている。事実、学研のそれとの現地照合でも、6,560 mと推定されるピークは見当らず、この地域の最高峰はN 8（P 6,392 m）と考えている。しかし、現地民が「ボルグマ」と命名した顕著なピーク（6,560 m）が、その意味から推してN 8とは別に存するのではないかという疑念もわくのである。

Z 2（6,175 m）は、3つのピークを持ち、最北

の雪峰が主峰と思われる。デチ谷に面した2つのピークへは、さしたる困難もなく達する事ができると思われるが、雪峰へのルートは定かではない。

Z 2の西に岩峰がある。標高は明らかではないが、Z 2と比して見劣りしない山容である。

標高・その他

この地域のピークの標高は、1913年のイタリア隊の測量によるものが、そのまま使用されている。N 8は、1978年のイギリス隊の登頂によって、6,392 mである事が、彼等の高度計により証明されたとの事であるが、その他のピークの標高は未だに実証されたものはない。ハンザルでかいま見た1968年版のインドのArmy Mapの表記は、N 8の位置と推察できるこの地域の最高峰で5,420 mである。

また、ピークの呼称にしても、Z 2がZaskar 2の略であるように、イタリア隊の付した測量ナンバー（と思われる）が、そのままピークの呼称となっている。

このように、この地域のピークは、67年前の測量による標高のまま、名前も与えられず眠り続けている。——淋しい思いである。稲田氏の「徒らに混迷と困惑を招くことになる」（広義の意であろうが）という思いに追従するのみである。

測量器を持たぬ身とて、荒井記の概念図は、学研の地図に従って、写真と記憶に基いて同定したものである。小生の浅学から生まれた同定や推察が、修正され、より正しいものに生変ってゆく事を念じている。

ネパールの自動車道路

五百沢 智也

1969年、トニー・ハーゲンは、ネパール開国以来10年の歳月をかけたネパールのほぼ全域にわたる野外調査の結果をまとめて、地質学的な報告書を発表した。

その付図として140万分の1のネパール国地勢図がある。これはそれまでの1インチ4マイルの地勢図を自分の調査により修正し、美しくシェーディングをほどこしたものだ。この図を見ると、ネパール国内の自動車道路は比較的長い1本と短い3本の計4本だけである。1本は、インドのラクソールから、ビルガンジへ入り、シムラ、ヘタウラを経てダマンの峠を越え、カトマンドゥ盆地へ入るもので、トリビューバン・ラジ・マルガと呼ばれているものだ。あとの3本はタライの平地を南北に走って、インド国境とヒマラヤ山麓を結ぶもので、東のものはインドのジョグバニからネパールのピラトナガルに入り、バラバドラ・ラジ・アルガ、北のダラン・バザールへ達するもの、中央部では、インドのナウタンワからネパールのソナウリに入り、バイラワを通して北のプトワルに達するもの、西部ではインドの鉄道終着点のネパールガンジ道路駅とネパールガンジの町を結ぶ4kmばかりのものである。

このハーゲンの地図は、地図だけとしても売られており、筆者は1970年のネパール訪問の際にカトマンドゥの書店で買うことができた。その後も行く度にカトマンドゥの店頭で見かけたいろいろな地図を購入しているが、それらを並べて眺めると、ネパールの自動車道が急速に延長され、整備されてきた様子がうかがえる。

1971年、プトワルまでだった中部の南北道路はタンセンの町の東側を通してカリガンダキの下流（クリシュナガンダキ）を渡りポカラまで延長（計20のkm）され、シッダルタ・ラジ・マルガと呼

ばれるようになった。中国国境のコダリとカトマンドゥを結ぶ道路はそれより早く、1966年に全通（176 km）、アリニコ・ラジ・マルガと呼ばれた。次にできたのが、トリビューバン・ラジ・マルガのヘタウラの町からラプティ川沿いにインナー・タライのチトワンにくだるバラトプールまでの道で、これはマヘンドラ・ラジ・マルガあるいは、イースト・ウエスト・ハイウェイの一部となって後に東西方向へ延長された。

トリスリ・バザールへの旧ポカラ街道の道も、トリスリガンダキの水力発電所建設工事に伴って建設された。このあたりまでが、1970年インディアン・ブック・デポ刊行のネパール全図に出ている道路だ。もう一つ新しくトリビューバン・ラジ・マルガのナウビセから西へ向うポカラ道路も示されているが、これはもっとあとの1973年に完成したものだ。インド国境と連続する道路、トリスルへの道路はインドの援助により建設されたが、コダリとカトマンドゥ、このポカラへの道路は中国の援助によるものだ。ポカラ行のバスには、1973年の道路完成直後に乗ったが、当時はまだ未舗装で地名の標識もなく、未完成の橋梁のところはまわり道で仮橋や渡渉場を通過するというものだった。ほこりがものすごく、早朝カトマンドゥを発った普通定期バスが夕方ポカラに着くころには、乗客全員の頭が浦島太郎よろしくまっ白になっていた。このポカラ行の新道はブリティビ・ラジ・マルガと呼ばれるもので、今は橋も舗装も標識も立派に完成している。

1976年末にカトマンドゥで買ったナトラジ・トゥアー・アンド・トラベルズ発行の（刊行年次など何も示してない）地図では、西のダンガリか北のヒマラヤ山麓までの道、プトワルから中央のバラトプールへの東西方向の道、さらにトリビュー

パン・ラジ・マルガから東へ向う道がネパール東南端のカカルビッタまで示されている。これがイースト・ウエスト・ハイウェイであり、英国、インド、ソ連、USA、イタリー、タイなどの援助協力で作られたものだ。道路を車で行くとところどころにその協力の記念碑が建てられているのを見ることができる。ネパール王国中央部のところだけは、シワリーク（チュリア）丘陵がインドとの国境になっているので、ブトワルからヘタウラまではラプティ川沿いのインナー・タライ（チトワン地方）を通過している。あとはヒンドゥスタン平原につらなる外部タライの大平原を東西に走るものだ。ネパールでは計画の中からこれにマヘンドラ・ラジ・マルガの名を用いていたのだが、イースト・ウエスト・ハイウェイが有名になった今はどうなのであろう。

1976年に買った地図では、ブトワルから西のこの山麓ハイウェイの部分が建設中の記号で示されていたが、現在は既にネパールガンジまで完成しているということだ。

さらに、これらの自動車道路沿いに、ネパール測量局が1等水準測量作業を進めている。今年度（1980年）はネパール東南端のカカルビッタまでが目標になっていて作業中であり、他の部分はすべて完了したということだ。HAJのカンチェンジュンガ登山隊学術班の第1テーマは、この水準路線を延長して、ヤルン氷河のB.C.までもって行こうというものである。この水準測量は、ヒマラヤ山地の精密な標高を把握するための基礎として絶対必要なものであるが、そればかりでなく、現在のヒマラヤの隆起量を知り、過去のヒマラヤ山系成立の謎を解明する手がかりの布石でもある。さらに重力測量など種々の地球物理学的な調査のための大事な要素ともなる仕事であり、カンチェンジュンガ山群の標高再点検のおもしろさよりも、そうした地球科学的な意義のほうがはるかに大きく重要である。もっともカンチ再測の結果がエベレストの標高をしのぐことにでもなれば別問題である。

1956年に行われたマヘンドラ国王の戴冠式に合わせるように開通したカトマンドゥ＝バインセ間のトリビューバン・ラジ・マルガの一部である1

15kmに始まって、23年後の1979年にはほぼ2,000kmの道路ができあがったのだからネパール自動車道は大発展である。

これらの道路にはできるとすぐの時からたくさんの定期バスの路線が作られて運行され続けている。いずれも1時間乗って3ルピーぐらいのかなり安い料金だからネパールのはずれまでも100ルピーもあれば旅行が可能である。カトマンドゥからは、インド国境のビルガンジ行、ポカラ行、ティベット国境のコダリ行、バラビシ行、トリスリ行などのバスが出発し（出発地点がそれぞれちがっているので注意）ビルガンジからはビラトナガール行、バラトプール行やジャナクプール行が出ているし、ポカラからはブトワル行、ソナウリ行が、ブトワルからはバラトプールのナラヤニ川対岸のデビガート行や西のネパールガンジ行のバスが出る。このデビガートとバラトプール側のナラヤンガール町との間はまだ架橋が終っていないため丸木舟のフェリーでワニのいるナラヤニの激流を渡らなければならない。また、ネパールガンジ行ができてから積迦の誕生地のルンビニへ行くのには、これまでどおりバイラワからジープをチャーターして2度の渡河をやって行くか、定期バスを利用するにはインドにビザを貰って入り、再びネパールのビザを貰ってインド側から入りなおさなければならない。

ポカラ、タンセン、ブトワル、ナラヤンガール、チトワン、ヘタウラ、ビルガンジ、カカルビッタ、ビラトナガールと廻った。トリスリ・ンバザールやチャットラ、ダランバザールのコースは前に乗ったことがあったし、バラビシまでは1970年に経験していたし、今回のセミナー・トレッキングでコダリまでも行って来たのだから、通っていないところは、ネパールガンジ＝ブトワル間だけとなった。

ネパールの普通定期バスは大荷物を屋根の上に積むスタイルで椅子も粗末なのが多いが、外国人と見れば、運転手横のいい席をわざわざあけてくれたりして親切だし、食事やお茶を宿場でとったりする時などなかなか楽しいものである。

ヴェリエル・エルウィン小伝

連載 (7)

転身・訣別・離反 ～ その1 ～

藤井 毅

《中央には小さな教会堂があり、それを取り囲むようにして土を塗った竹製の塀が広々とした中庭を作っている。教会堂の正面には五部屋よりなる家があるが扉も外壁もなく、そのため部屋の中に座しているとまるで船の甲板にでもいるかのようだ。そこからは丘陵の稜線が見わたせ、すぐ目の前には木々に覆われた美しい谷が、右手の方には丘陵と原野の広大な広がりがつづいている。》

(Leaves from the Jungle, 2nd ed., London, Oxford Univ. Press, 1958, pp40-41 の1932年3月10日付の日記。以下本書は単に「日記」とする。)

シャムラーオの「医者」としての働きなしにはとても村落の中に入り込めるものではなかったのだが、とにかくこんな「アーシュラム」を2ポンド程の出費で作らば、Karanjia での生活は始まっていた。エルウィンがまずそこで目にしたのは、多くのライ病・性病患者であったが、それでも歌と踊りを失うことなく生き続けるゴンドの人々の姿だった。ライ病患者のための診療所を作り、学校を建てて活動するその頃のエルウィンは、まさにアッジの聖フランチェスコに重なりあうものを自らのうちに思い出していたに違いない。しかしそれも、政庁にとってエルウィンがイギリスに弓を引く好ましからざる危険人物であることには何らの変わりをもたらすものではなかった。彼らは始終警察の監視下におかれ、幾度となく搜索を受けた。エルウィンが国教会の牧師であるがゆえに、しばしば教会当局の干渉するところとなっていた。Karanjia への定着を政庁に儀礼的に報告したエルウィンに対し、Mandla のDeputy -

Commissioner からはこんな返事が寄せられた。《貴下の1月29日付の手紙に関し、長官 (Commissioner) は貴下に対し、その政治的記録に鑑み、本地区に滞まっていただきたくないむね通知するよう私に要請してきたことをお答えする》(自伝, P26)。5月にはいとナーグプルのビショップの一行が来訪し、彼らはエルウィンをして「神への裏切者」・「国王への反逆者」であるとし、「悪魔の所業を為している」と罵っていったのであった。(日記, P47) 国民の会議派に深くかかわったエルウィンらの「トライブ」の中での奉仕活動は、別の次元で大きな波紋を巻き起し始めていたのである。

一方、インドの政治情勢はガンディーが1931年3月の国民会議派カラチ大会より除々に政治の場より後退し、「不可触民」のための活動に移行していく中、労働・農民運動は高まりをみせ、来るべきインド統治法改正に向け、大きな曲り角にさしかかっていた。インド民族運動の活動家の多くが獄中にある中、エルウィンは雨期を利用し、そのインドの現状を訴えるためヨーロッパに向ったのである。

パスポート再発の拒否—妥協と転進—

まず、ボンベイで最初のトラブルが起った。1932年6月にKaranjia からボンベイに出てきた時点ですでにエルウィンのパスポートの有効期限は切れていて、ボンベイ州政府は3週間の期間を限っての再発給しか認めようとしなかったのである。それではイギリスに着くのが精いっぱい、イン

ドにはもどってこれないものであった。最初その事態を知ったエルウィンはヨーロッパ訪問をあきらめるのであるが、事実経過をボンベイの英語の新聞に発表することにした。即座にインド人各層から巾広い反応が寄せられ、「帝国主義者」にあらざるイギリス人に対する州政府のその措置に対し抗議の声が高まっていた。その直後、the Chief Passport Officer より手紙がもたらされ、そこには再発効の拒否は単に事務手続き上の原因になるものであり、イギリス到着後、五年の年限いっぱいパスポート更新がまちがいに可成りであるから心配しないようにという内容が記されてあった。エルウィンをインドから追放しようとする意図があることを彼はもっと理解しているべきだったのかもしれない。しかしそのときは、ヨーロッパに向いインドの実情を訴えることは必要であったし、母親が重い病にかかっていたこともあり、彼はボンベイを後にしたのである。シャームラーオはその間、医療技術の訓練を受けるべくインドに残ることになっていた。

イギリスに着くまでイタリア・スイス・フランスを経由し、それぞれでインド民族運動に関心を寄せる人々と接触し幾度かの講演会・集会をもっていった。ロンドンではC・F・アンドリュースが待っていた。ロンドンの新聞は、イギリス人でありながらインドに自治をと訴えるインドからやってきた牧師・エルウィンのことを大きく取り上げた。エルウィンは実に精力的にイギリス政・官界の主要な人々に会い、インドに自治を与えることを訴えていく。Lord Irwin, Lord Sankey にも会った。インド担当国務大臣であった Sir Samuel Hoare, 後の Lord Templewood は彼との会見を拒否した。インド省内におけるエルウィンへの評価は当然のことながら最低であった。そしてそれは、ロンドンで更新されるはずだったパスポートの発給拒否という形で現われてきた。発給当局はインド省よりの要請として正式に交附の拒否を通告してきたのである。仮に発給を受けられるとしても、渡航先にインドが含まれていないのなら何の意味も持たないものであった。ボンベイでの軽い決定が深い淵に彼らを追いやっていた。自らの望む活動の足場を中央インドに築きあげた

ばかりの彼にとって、それは実際的な「投獄」にも等しいものであった。そしてある面で、自分の「安直工」を思い知らされるものであった。エルウィンの陥った事態を知った友人らが裏で運動しインド省にその撤回を迫った。——彼自身名門オックスフォード大学出身であることを想起されたい——。その結果、エルウィンのインド再入国のための妥協が成立したのである。その代償が何であったのかは評価と判断の分れるところであるが、つまりそれは“今後いっさいいかなる形の政治運動からも身を引き、またそれに携わる人物と交渉を持たず、反政府的な言説をなさず、ただゴードンの中での活動に専念する”というものであった。これは政界入りは為さなかったとはいえ、エルウィンにとっては完全な方向転換を迫る全面降伏の要求に近いものであった。

エルウィンはそれに署名をした。

インドの現状を訴えるためにと故国にもどった彼は、逆に自分自身に方向転換を強いることになってしまったのである。それまでのある面で華々しい活動ゆえに、その決定は多くの誤解を招き、大きな孤立をもたらした。アンドリュースはそれを認めなかった。ガンディー、バジャージ、クリシュナ・メノン、そしてフランシス・ヤングハズバンドらはそれを理解してくれた。良しにつけ悪しきにつけ、もはやエルウィンには口をつぐみひたすらゴードンの中での活動を続行するしか道は残されていなかったのである。自分の理想実現のため、シャームラーオと始めたことを投げ出すわけにはいかなかったのである。確かに形骸としての政治活動には興味がなかった。しかし、ガンディーらのインド民族運動との接触を断たれたことは大きかった。ある人達はエルウィンを「裏切者」とした。重い事実として、彼は自伝でも仔細に触れるようとはしない。

1932年後半以降、インド民族運動の表面よりエルウィンは身を引く。それはまさに、ガンディーのインド政界からの後退と時を同じくしていたのである。

＝つづく＝

事務局日誌

月日	曜	摘 要
1. 29	火	学術調査計画協議（五百沢・稲田）
2. 3	日	学術調査申請書作成
2. 4	月	広島集会通知
2. 7	木	カンチ財務協議（国会、他）
2. 8	金	カトマンズと国際電話にて打合
2. 11	月	法人関係資料検討
2. 12	火	学術調査協議（於 福島・五百沢・稲田）
2. 13	水	日山協分部副会長と協議
2. 16	土	カンチェンジュンガ委員会（於 ルーム）、カンチェンジュンガ偵察隊壮行会（東京 50名出席）
2. 17	日	カンチェンジュンガ委員会（於 ルーム）、インドヒマラヤの集い（名古屋

月日	曜	摘 要
		25名出席）
2. 18	月	Capt, Kumar と協議、「ヒマラヤ第100号発送」
2. 20	水	カンチ偵察先発出発
2. 21	木	ネパール政府へ学術申請書提出
2. 22	金	IMFへ登山申請書
2. 23	土	広島集会（稲田・西村出席）
2. 24	日	日本ヒマラヤ会議（京都、稲田・山森出席 45名）
2. 25	月	茗溪堂と委託書打合、自転車振興会打合、松本事務局員本日から勤務
2. 26	火	文部省スポーツ課 戸村課長と協議（稲田）
2. 28	木	インド・ヒマラヤ集会各地区協議
2. 29	金	エア・インディアと協議（インド・ヒマラヤ集会の件）、事務局会議

寸 感

今月号より臨時編集部として6月までの4ヶ月間、編集業務を担当します。素人の小生にはプロの角田編集委員ほどの仕事は出来ませんが、とに角頑張ります。宜しく願い致します。

カンチ偵察隊も出発しました。多大な成果を期待したいものです。（I）

ヒマラヤNo.101（4月号）

昭和55年3月10日印刷 55年4月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 伊 東 満

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160東京都新宿区高田馬場3-23-1-506

原稿募集

ニュース ヒマラヤ（中央アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc……。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。“記録”ではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、横書きをお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やH A Jに対する提言などもお寄せ下さい。

またヒマラマ地域へ出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

ヒマラヤへの装備



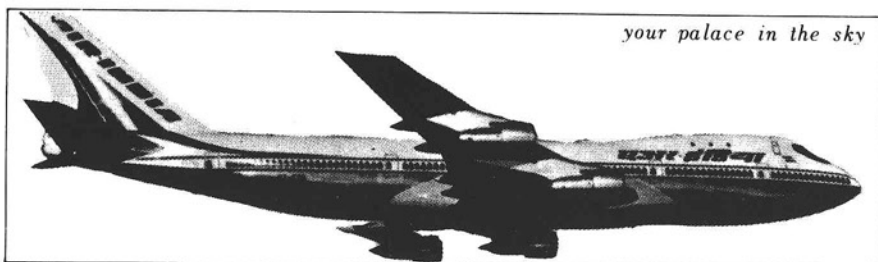
◎遠征隊の装備、相談にのります。



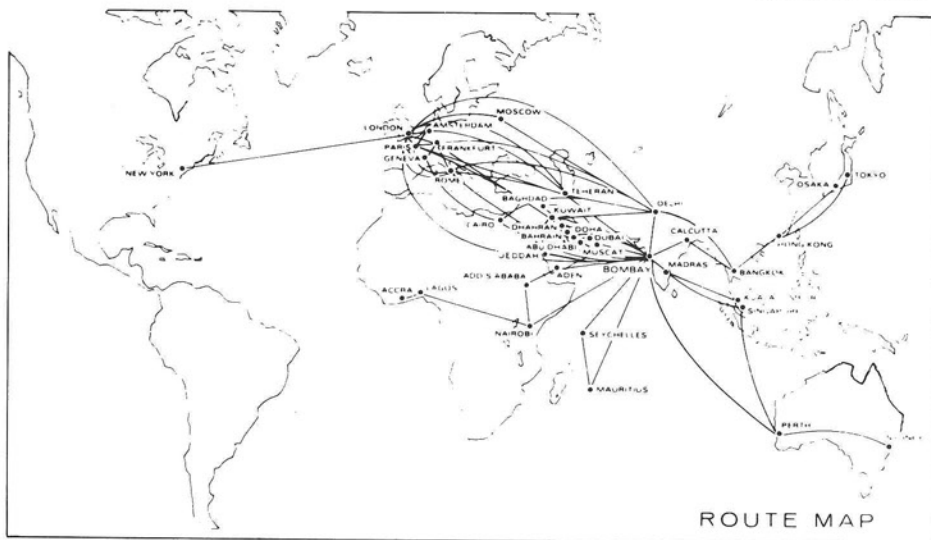
ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2-2-3 ☎03(208) 6601代
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1-16-7 ☎03(346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-14 ☎03(264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-6 ☎03(264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県高崎市宮町 2-123 ☎0486(41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2-19-10東和ビル内 ☎03(200) 7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の耕井 (HAJ会員) まで、お問い合わせ下さい。

名古屋 ● 中村区名駅四丁目 7-35 ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450 ☎ (052) 583-0747

世界の40都市をネットする
エア・インディア

東京 ● 千代田区有楽町日比谷パークビル	〒100 ☎ (03) 214-7631
横浜 ● 中区常盤 1-2 関内日本ビル	〒231 ☎ (045) 651-2874
大阪 ● 東区備後町松豊ビル	〒541 ☎ (06) 264-1781
神戸 ● 葺合区布引 2-1-3 新布引ビル	〒651 ☎ (078) 222-1919
福岡 ● 博多区博多駅前 1-3-21 八重州ビル	〒812 ☎ (092) 471-7172